

吉野復興大臣の宮城県訪問ぶら下がり会見録
(平成29年7月13日(木) 15:00-15:12 於) 石巻市)

1. 発言要旨

こんにちは。今日は仙台市にあります、「みやぎ心のケアセンター」を訪問してまいりました。これは心の自立を目指すところでございます。いろいろお話を伺いますと、支援者の集まり、支援をしている役場の職員等もそうなんですけれども、支援をしている方々が少し心の疲れがあるという、ある意味のオーバーワーク的なところもあって、支援者の支援をここでやっているということです。ここのところは、一番大事なところでありまして、行政と被災者が復興を担っていくわけなんですけれども、被災者だけではなかなか復興できません。被災者以外の支援者という方々がNPOを通じて、またボランティアも通じて、役場職員も通じて、復興を担っているわけでありまして、この支援者のところが、一番、私は復興においては大事なところということで、今、(被災地訪問) 2巡目ですけれども、支援をしている方々を重点的に訪問することとしております。

次に石巻、「COMICHI石巻」というところです。普通、津波で被害を受けると、基盤整備をして、全部片付けて、さあ、新しい町、新しい道路を入れてという形で復興を進めていくのが大部分なんです。ところが、ここは昔の街路を残したままミニ開発をして、商業、にぎわいを取り戻すという、私にとっては本当にうらやましいなというふうに思います。震災前、ここで生まれた方は目をつぶってでも、自分の町ですからわかります。震災後も目をつぶってでも、ちゃんと町が歩ける、そして、復興しているということでございますので、すばらしいことだなというふうに思いました。

次は「元気いちば」。ここは木材でいっぱいつくられていまして、ここの町内に住む市民の市場という機能と、これから多くの観光客等々が集まってくるので、そういう観光客の一つの顔という、2つの機能を持たせなければならないと思っています。その機能を十分に発揮するだけの施設、設備が整っているすばらしい施設ということでございます。私、ホヤ蒸しが大好きなものですから、たくさん買ってしまいました。今日、帰ったら、東京の仲間とホヤ蒸しを食べながら、お酒を、ビールを飲んでいきたいと思います。

次はDMO、石巻圏観光推進機構というところです。観光を中心にまちづくりをやろうということで、地元の後藤さんが社長さんになられて、一生懸命、観光を中心に石巻のまちづくりをやろう、

そこに石巻以外の斉藤さんという方が、これは企業から派遣された方なんですけれども、このまちづくり会社を立ち上げるために御助力をされた、それで、定年を前にして企業を辞めて、この石巻のDMOに、そこをきちんと立ち上げようという形で、こういう石巻以外の方々がきちんと石巻のことを考えてくれるということが一番、私は大事なことだなと思いました。だから、皆さんの多くの支援を頂いて、ここまで復興できたんだなと、こんな思いでございます。

次に旧国立競技場の聖火台のあるところを見てまいりました。（聖火リレー出発地・聖火台誘致委員会）委員長さんは、東北の復興五輪を象徴する聖火リレーについて、ここで出発式を挙げたいという強い要望がございましたので、過日、森組織委員会会長、丸川大臣、そして小池東京都知事の3名に復興五輪よろしく願いしますという御挨拶をした折に、聖火はこの石巻から出発してくださいというお願いもしたことを御報告させていただきました。

次にいろいろな被災者の支援を行う「石巻じちれん」等々のお話を伺いました。今日もここで「お茶っこ会」をやっておられて、今、被災者の方々と直にお話をしたわけなんですけれども、こういう支援をする皆様方がきちんといるから、被災者の方々は本当に今、笑顔をたくさん頂いて、私も元気を頂きました。また、皆さんからも、私から元気をもらった、ありがとう、というお言葉も頂きました。半島部で被災を受けられたという方は、仮設に来て、至れり尽くせりで、本当に感謝しているという言葉も頂きました。これも支援をしている方々が誠心誠意、心を込めて支援活動をしている賜物であり、被災者の口からそういう言葉が出たのかなということで、この皆様方の活動に本当に心から敬意を表したいと思います。

2. 質疑応答

（問）今日は様々な視察、そして意見交換をされて、全体を通して、復興状況、一番強く感じられたことはどういうことですか。

（答）6年前のあの姿を見ておりますので、よくぞ6年かけてここまで立ち直ったなというのが第一印象です。最初（6年前）に私、石巻に入ったときには、においです。魚を捨てるあのにおいは映像では伝わりません。その本当にもうどうにもならない石巻の姿を見て、よくぞここまでみんなで頑張って、それぞれの方々が頑張ったから、ここまで復興できたんだなという、そんな思いでございます。

（問）これから国の支援、アドバイスも必要かと思いますが、どういったことをこれからしていこうとお考えですか。

(答) ハード面はもう順調に進んでおりますので、私は先ほど申し上げましたように、支援者の方々、いわゆるソフトのところに大きく復興行政のハンドルを切っていきたい、このように思います。心のケアもそうですし、あと水産物、なかなか、グループ補助金で工場は立ち直ったんだけれども、売行きが足りないというのが宮城、岩手の共通課題なんですね。ですから、そういうところも含めて、ソフトの部分の方に復興行政のハンドルを切っていきたいと考えております。

(問) こちらの南境の方は、石巻は今、仮設の集約が進んでいる中で、仮設から仮設へ移転せざるを得ない方もいらっしゃると思いますが、そういう状況はどういうふうに受け止めていらっしゃるのか。

(答) 今も、「私は集約されてここに来たんです」とニコニコしている方がおられました。震災前の集落との絆、そして、仮設での絆。もう今、復興住宅に移られている方がおりますけれども、今日も来ています。そういう仮設での絆を大切にしたいという、そういうお話をいっぱい伺いました。あの災害がなければ、今日のメンバーとは私らは一生会えなかったというお話があったように、やっぱりピンチをチャンスにして、多くの方々と出会えたという、この喜びを大きく捉えて、ピンチをチャンスにという頭の切り替えがどうしても必要なのかなと思います。

(問) 一方で、残っている方は生活弱者の方も多いという話が先ほどありましたけれども、どのような支援がより求められているのでしょうか。

(答) いわゆる生活困窮者の方々に対しての支援組織というのも、先ほどのところでございましたので、そこは本当に一番大事なところなんです。でも、その方たちに申し上げましたけれども、最初は、食料も何もないですから、魚をくれる。魚を食べちゃいます。次にまた魚をくれる。魚をくれ続けていると、ずっと自立できません。いつかは釣竿を支援して、そして自分で釣っていただくという政策に、支援の仕方を切り替えていかねばならないと思っています。そこも見据えて、今、魚を支援しているという団体、一番大事な団体のところとお話をしました。

(問) もう一点だけ。先ほど「石巻じちれん」の方と仮設の狭さの話をちょっとされていて、古い災害救助法で、今、変えた方がいいのではないかとおっしゃっていましたが、もう一度改めて伺えれば。

(答) 災害救助法も大分昔につくられたものですから、狭い間取りなんですね。物入れがないんです。だから、物入れは後付けでみんな表に付けていますけれども、もう最初から押入れを付ければ、

今の間取りで結構ですから、物入れさえあれば。そういう意味で、私は仮設暮らしをした方に、災害救助法を改正して、仮設住宅が狭過ぎる、もっと大きくしてくれという声を上げてもらいたいというお願いをしたところです。あとは我々の国会の方でやりたいと思います。

(問) 変えた方がいいというふうに。

(答) 当然です。見たことあるでしょう。

(問) 聖火台を視察されましたけれども、改めて聖火リレーの出発地の誘致を進めているのですが、その実現に向けて、これからなんですけれども、どんな支援をお考えなのかということをお願いしていいですか。

(答) I O C のルールで、1 0 0 日で、そして日本全国一筆書きで回りなさいという聖火リレーのルールがあります。これを森会長は、このルールでは日本の場合できない。もっと緩めてくれというお願いを今、しているところです。そういうことも含めて、石巻のスタート、復興五輪の象徴としての石巻のスタートは、これは理にかなったものというふうに私も思いますので、森会長も一緒になって頑張っていきたいと思います。

(以 上)